

私が考えるモチベーション「GIVE, GIVE, GIVEの精神」

*司会：

これより現役学生及び卒業生による報告とさせていただきます。それではよろしくお願いいたします。

皆さんこんにちは。今年の3月に早稲田大学の国際教養学部を卒業しました北村麻里子と申します。今、都立高校で先生をしていて、ちょっと今日は授業と違う雰囲気でするので大変緊張しています。それと同時に、今、2カ月の子供の母でもありますので少し準備不足な部分もあるかと思うんですけれども、7分の間最後まで、ご清聴よろしくお願いいたします。

本日は「本気」と、「Give, give and give」という、先生の2つのキーワードを用いて、私が考えるモチベーションについて話させていただきたいと思います。私はスタント先生のゼミに入った当時、2つの目標がありました。1つ目は、スタント教授は教育の博士号を持った国際教養学部唯一の存在であり、私は教育に関わる仕事がしたいと思っていたので、彼のテクニックを自分のものにしたいということでした。2つ目は、怠惰な自分を直すと書いてあります。なぜこのような目標を持ったかといいますと、スタント先生のゼミに入るためには条件がありました。必須になっている書籍を読む、エッセイを提出する、インタビューを受けるということが条件でした。しかし、私は提出期限といったものにとってもレイジーでして、これらの達成ができず、後日受けさせていただいたインタビューで厳しく指導を受けました。そこで、せっかく指導していただいたのだから、このレイジーさはゼミの中で直していこうというふうに思いました。

3年後期、ゼミ所属当初、時間に間に合うような人になりたい、約束や期限を忘れないような人になりたいと願いながらゼミに所属したんですけれども、こういった思いはスタント先生のゼミの間に思い出するという程度だったんです。で、それだとどういうことが起こったか。2011年11月、私が実際に授業後に書いたフィードバックによると、「たくさんやることがあると一つのことに集中できなくて、すべてのことが敵のように見える」というふうに書いていました。先生に、「何でこんな怠慢さは直らないんだろう」と何度も何度も聞いたところ、本気度が足りないんだよ、というふうに言われたんですね。本気度というのは何なのか？この怠慢さが直らないというのは永遠のテーマなのかというふうに私は思ったのですが、じゃあ本気の前兆として実践をしてみようと思ったんです。で、じゃあ提出期限に間に合わないのが原因だから早く取りかかってみればいいんじゃないか。下調べなどに時間をかけるようにすればいいんじゃないかと思いました。そうすると、プレゼンテーションやエッセイを提出するにあたって、早く取りかかるようにした分だけ時間の余裕ができて、その内容自体が心から面白いな、エッセイを書くこと、提出自体が目的ではなく、この内容ってすごく面白いなというふうに思うようになったんですね。これは私にとって本気ということなんだというふうに初めて気付かされました。

そして、本気で取り組める人間に私は少しずつ、簡単にはいきません、先ほどのスーさんのお話のように、21日チャレンジして、もっとチャレンジして、それでやっと本気で取り組める人間になってきたかなというふうに思っています。「本気」というのはスタントメソッドの核の部分でありまして、先ほども何人かの方がお話しされていたように、外発的モチベーション、内発的モチベーションとありますが、アメとムチの動かされ方ではなくて、自分から何か物事に興味をもってやれるように、つまり内発的に同期づ

けられるようになったというふうに考えています。

私がもともと課題に取り組んでいた理由は、提出期限に間に合わなくて悪い成績をとったりするのが恐いし、成績がとりたいからという理由でやっていた。これは説明は要らないと思いますが、外的モチベーションで、課題に取り組む理由が、そのこと自体が面白い、自分がやりたい、文章を書きたいというふうになったのが内発的モチベーションだったり、スタント教授のいう本気の部分なのかなというふうに私は考えています。

今でもスタント教授がよくおっしゃってくれるんですけれども、私が4年生の時に卒論を書いているとき、「先生、シャワーを浴びてる間も卒論のことを考えちゃうぐらいすごく楽しいんです」と言ったんです。それをスタント先生は卒業後、(旧姓は荻原なのですが)、「荻原マリコさん、そういうことをいつも言ってたよね、4年の頃は」というふうに、今でもよく昔話として話してくれています。今年の1月に出したファイルナルレポートには、「I'm observed in writing thesis.」というふうに書いていて、この2011年の11月のコメントと比べると大分私は変わったかなというふうに思いました。

後半、Give, give and giveの話に移ります。その心を発見した時は、私は人間関係の悩みがありました。4年生の前期ですね。ある人とすごくうまくいなくて、何も手がつけれないくらい悩んでいたんです。これは並木さんという先輩の方のプレゼンで、「Give, give and giveという言葉スタント先生からの教訓で私は大事にしています。」というふうにおっしゃっていて、もう涙が出るほどそのプレゼンに感動して、私に足りないのはここなんだなというふうに思って感銘を受けました。そこでスタント先生に、こうこうで、ある人とうまくいなくてと相談したんです。そうすると先生が放課後、1時間以上話を聞いてくれました。それから、Give, give and giveというのは何かというと、「俗にいうギブアンドテイクではだめなんだよということでした。何かというと、ギブだけをしてればいいよ、そうすると自然に相手に影響して、相手も変わってくれるから、とにかくギブだけを試してみね。」というふうに先生は言ってくれました。身近な人ほど難しいと書いてありますが、今の私、ある人というのはここでちょっとあれなんですけど、当時のボーイフレンドのことで悩んでたんです。今の旦那さんのことですごく悩んでいて、先生に、身近な人ほど難しいから21回頑張ってごらんというふうに言われて、なかなかうまくいかなかったけど続けていくうちに、その人間関係も改善されていきました。それで、自分から相手へと、視線が動くようになったんですね。もう自分ばかりどうしよう、どうしようと思っていると、どうしても相手に気が回らないんです。前半にお話しさせていただいた本気なんですけれども、本気で取り組めると結構自分自身に余裕が出てきて、自分の幸せ充実感だけではなくて、「余裕が出てきたから相手を幸せにしてあげたい、相手に充実感を与えたい。」というふうに思えるようになりました。これがスタント教授のゼミに所属した間に私が一番大きく変化した部分かなというふうに思っています。

私が考えたところによると、相手に何かプラスの影響を与えるには自分自身が満たされている必要があって、その自己実現をスタント先生はすごく手伝ってくれました。そこで私は先生を人生のロールモデルというふうに考えるようになりました。高校教員の仕事においては、いつもGive, give and giveの実践的テクニックを忘れずに、生徒にも、何でもこうしてくれないのよというのではなくて、自分からいっぱい与えてあげよう。そうしたら生徒は必ず伸びてくれるというふうに信じて、先生の真似をしているという部分があります。

二番目ですね、一児の母として。まだ2カ月なのでもう本当にあやしても笑ってくれるわけでもないし、常にこっちからGive, give, giveですね。3時間に1回授乳して、夜泣きもしてという毎日。その中でこのGive, give and giveの精神を学んでいて本当に良かったなというふうに私は思います。それほど子供に与え

られることがすごく自分で幸せだなと感じています。

前半にお話しした本気という姿勢と、Give, give and giveというのは実はつながっていて、本気で取り組みれば自己に余裕ができて、人に与えられる人間になるということになります。私はそこに気付けたことがすごくうれしいし、数あるスタントメソッドの面白さだと感じています。スタントメソッドというのはたくさんいろんなことがあって、一つ一つ覚えるのは難しいと思う方もいるかもしれないんですけど、こうやってつながっているので実践していくうちにどんどんそれが自己実現につながっていくのではないかと考えています。

短い時間でしたが、ご清聴ありがとうございました。(拍手)